

入選

兄が言った「ごめん」

岐阜県 小坂中学校 一年
今井 桜子

「ちょっと、しっかり下見てよ。」

それは、私の足を踏んだ兄に放った言葉だった。私には、4歳年上の兄がいる。兄とは、料理をいっしょに作ったり、たまに喧嘩したりする。兄はどこにでもいるような、高校2年生である。視覚に障がいがあることを除いては。

障がいが無ければ、なんということもない言葉だったかもしれない。しかし、片方の目がまったく見えていない兄にとっては、理不尽な言葉だった。だから、言い放った後で、「しまった」と思い、すぐに罪悪感と後悔が湧き上がってきた。なんで、そんなこと言ってしまったのだろう、そう思った。

しかし、そんなあまりにも配慮に欠けた私の言葉に対し、兄は「ごめん」と言った。こっちの方が悪いのは、明白なのに。私はどうして、と悶々と考えているうちに、謝るタイミングを逃して、言い出せなくなってしまった。日々を重ねるごとに、心に残る兄の謝罪が重くのしかかるようだった。

そんなある日、またもや兄は、私の足を踏んづけた。踏まれた痛さとともに、イラつきが体に広がっていくかのように感じた。言うてはいけないと思っているのに、「ちょっと」と言葉が喉元まで出かけた。でも、そこであのとき思ったことを思い出した。

兄は、謝った。悪くなんてないのに。それは、きっと障がいのない人にとっては、悪いことだと思ったから。ほかの障がいがある人も、そうかもしれない。悪くもないのに、謝る。そう思いだしたら、私は言葉を飲み込み、「いや、大丈夫」と言った。

兄は、少しびっくりしたようだったが、ホッとしているようにも見えた。普段の私なら、兄に当たってしまったかもしれないから。兄の様子を見て、私は「嬉しい」と思った。相手を安心させられるような言葉をかけられたことに。そして何より、兄が「ごめん」なんて言わないですんだことに。

障がいがある人に親切をするのは、難しいことかもしれない。その人が障がいを持っていると気づくことができなかったり、余裕がないときだってあるかもしれない。

しかし、悪くもないのに謝るような人がいなくなるように、少しだけ小さな親切を人にできたら、すてきだと思う。